

九州地方が既に暴風圏に入っていると発表すれば速刻電話で現地の模様を聞き、時には現地の情報なり測候所長の談話迄も入れてしまうその通信の速さには我々はただただ驚くばかりである。

第5号台風が四国付近で中央と大阪とで中心位置が違うとか分裂したとか新聞種になったのも、こうした高度の通信速度にものをいさせた結果であり、第14号台風の時も大阪では潮岬沖で東へ転向して大阪は大丈夫だと速刻情報を発表したにもかかわらず、東京では未だ発表の段階にまでいたっていなかったなどはそのよい例だと思ふ。かえって我々は地方の状況を逆に新聞社から聞かされるという始末であった。

若し大阪と東京との間に直通電話一本があったならあのような不手際はなかった筈である。

驚くべき通信速度を持つ新聞社を相手として昔流のトソツ方式オンリーの時代はすぎたのである。

災害時以外の作業は現在のままでも先ず差支えないと思われるが、災害時それも数百数千の人命財産をうばう

台風、しかも数日前から接近を予想される台風に対して無線の施設なくして防災の完璧を期することは出来ないと思われる。まして中央を頭脳として骨格を管区とし末端の測候所を含めて縦横無尽に手足の如く有機的に活動しなければならぬ气象台が、災害の都度半身不随に陥っていたのでは到底災害対策がたつわけがない。少なくとも中央と各管区地方气象台との間には無線による電話連絡をそれも二元、三元の連絡施設が望ましく、それによって一度び台風が襲来した時は随時各管区なり地方气象台の担当当番を呼び出し刻々迫って来る台風に対して技術あるいは防災上の打合せが出来たならば、完全に气象台の任務が遂行されると思われる。

現に今回の台風に際してはNHKは中央气象台にその施設を持ちこみ、東京・大阪・福岡の三元放送を行ったのを見せつけられたが、それにひきかえあまりに气象台の施設が粗末であるのに驚いたわけである。

(中央气象台予報課)

IUGG その他に出席した山本義一博士からの便り

1. Radiation Commission について(9月10日付、ローマより) 8日にいよいよ Radiation Commission がはじまりました。出席者約20名位で主な人達は Mörkofer, Ångström, Möller, Grumond (南アフリカ), Robinson (Kew) 等で、そのほか私の知っているのでは Canada の Godson が出ています。奇妙なことにアメリカからは1人も出ていません。この会議は殆んど問題が short wave radiation に集中されているが、自分は long wave rad. も equally important と思ふが、その方面は論議しないのかとききましたら、Ångström と Mörkofer がこもごも立って、我々は決して long wave rad. を除外しているわけではなく、その重要性を十分認めているが、目下の所では short wave に興味をもつもの9に対して long wave に興味をもつもの1の割合だから今のような会議のあり方になるのだらうと云うことでした。9日午後 Ramanathan がきました黒いこにこした老紳士で、凡ての人に重んじられているのはわれわれとしても大いに心強く思いました。

2. IUGG について(9月30日付、チューリヒより) Ramanathan が IUGG の次期の President になりました。IAM の方は President は Rossby, Vice President は Van Mieghem と Byers, Secretary はイギリスの Sutcliffe、次の総会はアルゼンチンのブエノスアイレスで開かれるときまりました。大体こちらの level も日本で論文を通して想像していた通りでしたが、Goody, Kaplan, King と優秀な連中は皆若い人達ばかり

りなので、私が long wave rad. で大きな顔をしておられるのも今暫くでしょう。今度の会議でも Brewer と Houghton (英の新進)の飛行機を使つての観測結果の発表がありました。ここ1、2年中に米、英で上空での赤外線射線測が大いに進歩すると思われ、

3. Cloud Physics の Symposium について(10月3日付、フランクフルトより) Zürich の会議での主な講演は Dessens, Mason, Byers, Rau, Fournier d'Albe, Facy, Rossby, Schaefer, Ludlum, Bollay 等でした。こちらの人達はもはや threshold temperature の存在を信じないか、もしあるとすれば -40°C 附近だが、これもその原因は水にあるのか核にあるのか不明といった見解のように思われました。人工降雨についての総合的意見はわれわれとほとんど同じでした。Byers の言葉をかりると科学はこれで不可能と思われていたことをいくつも可能にした。従つてわれわれはこの問題についても optimistic ならざるをえない。しかも同時にわれわれは Scientist としてその成果の判定にできるだけ cautious でなければならないということでした。Ludlum は commercial seeding と experimental seeding とに分けるとすれば、われわれは後者の立場をとるもので、そのためには Cloud Physics をもっと研究せねばならないといい、Mason は target area と Control area をもっと合理的に設定し、そこで5年位続けてはじめて statistically にあるていどのことがいえると思うとのべました。(以上私宛の手紙の中から私の責任で抜き書きして載せた。畠山久尙)